



世界の果ての通学路

私たちは、毎日学校に通い、勉強することを当たり前のように思っています。しかし、世界には学校に通うことがとても困難な子どもたちがいます。大変な苦勞をし、命がけで学校に通っている子どもたちもいます。

そんな子どもたちの様子を紹介する映画「世界の果ての通学路」が2014年に公開されました。この映画の中には、ケニア、モロッコ、アルゼンチン、インドの4カ国の子どもたちがでてきます。モロッコのアトラス山脈に住むザビラ（12歳）さんは学校に宿舎に入っています。月曜日に学校に行き、金曜日に家に帰るわけですが、その距離22km。徒歩で4時間かけて通っています。

インドのベンガル湾沿いの漁村に住むサミエル（13歳）君は、未熟児で生まれたため、手足が自由に動きません。そのため、車椅子にのったサミエル君を二人の弟ガブリエル君とエマニエル君が押しながら通っています。学校まで4km、毎日1時間30分かけての通学です。

先日の学校朝会で、この映画に登場するケニアのジャクソン（11歳）君を紹介しました。ジャクソン君は妹のサロメさんと二人で学校に通っています。学校までの距離は15km。毎朝5時30分に出発し、2時間かけて通います。道路などありません。広い草原や山の中を歩きます。当然、途中では多くの野生動物と出会います。キリン、シマウマ、サイ、ヒョウなど。そんな中で一番危ないのがゾウです。ケニアでは毎年、4～5人の子どもがゾウに襲われて命を失うそうです。

家を出るとき、お父さんは何度もゾウに注意するように話します。ジャクソン君は妹のサロメさんを守るため、いつも注意深くあたりを見回してゾウに見つからないようにしています。遠くでゾウをみたら、妹にも教え近づかないようにします。

学校も日本に比べれば本当に粗末なつくりです。教室には電灯がなく、窓から入る明かりの中で勉強しています。しかし、このような環境の中で、ジャクソン君はパイロットになりたいと将来の夢を語り、一生懸命勉強しています。

映画公開に向けて日本に招待されたジャクソンは、インタビューの中で「日本の子どもたちに伝えたいことは」と問われ、次のように答えています。

学校に通って勉強することは当たり前のことじゃないんだと言いたい。自分から進んでいくべきだし、学校に行けることを感謝しなくてはいけない。そして、学校に通う理由を自分に問いかけるべきだ。運動場を走り回るだけの場所じゃない。学校にはいろいろなものが集約されている。先生も教科書も大事な要素だからよく観察して有効活用すべきだ。学校にあるもの全てが大事。それらを自分の成績アップにつなげて将来に備えて欲しい。明日苦しまないためにチャンスを生かすんだ。

とても小学生だとは思えない言葉です。毎日の通学の困難さが、何のために学校に行くのかという意識を高め、将来の夢を育み、それに向かって努力する姿勢につながっているのでしょう。ジャクソン君の言葉が何のために学校に行くのか、自分自身の将来を考える一つのきっかけになればと思います。